

「デジタル審美修復の実際」

伊藤 竜馬

前歯部などの審美領域において、従来はほぼアナログ技工と工程が変わらないフルレイヤリング法がメインであったが、IOS やミリングマシンの発展、複合組成積層型ジルコニアの登場により、フェイシャルカットバックレイヤリング法やモノリシックジルコニアへのステイニング法などのデジタルをより活用した製法が可能となった。それらを応用することで可能となるフルデジタル技工・モデルレス技工による審美症例の製作工程と注意点について、またアナログ技工技術のデジタルへの活かし方について解説する。

デジタル時代に生きる 歯科技工士の技術とコミュニケーション その価値と継承について

佐野 隆一

「日常臨床のトラブルをなくしたい」「良質な補綴装置を提供したい」というのは多くの歯科医師、歯科技工士の方々が思っていることです。では、そのために必要なことは何でしょうか？

近年のデジタルデンティストリーにおいて、チェアサイドとラボサイドが適切に連携をとると補綴のクオリティは確実に高まります。では、そのために必要なことは何でしょうか？

求められるのは歯科技工士の技術とコミュニケーションです。そこで今回は私自身の臨床事例や経営での取り組みと合わせて体系化することで、その内容と意義を明瞭化したいと思います。

また、こうした研修を通じて、私たちが高めている歯科技工士の価値は何か？ 次につなげるにはどうしたらいいのか？ 歯科技工士会だからこそのできることを共に考えていければ幸いです。